

蠅螂の斧

第二部

トークライブ2001

第二回

団 士郎

仕事場D・A・N/立命館大学大学院

♪2014年前半は過去のあれこれを振り返っても、ことさら慌ただしい半年として印象に残ることだろう。年末あたりから浮上していた話が立て続けに動いて、2月末からロンドンに、3月中旬にはNYに、下旬には台北に出かけることになった。そしてGWには、雲南省・麗江と上海にでかけた。

それぞれ目的、理由があつてのことで、思いがけない発見が多々あつた。同行したのは皆、仕事関係者というより長年の友人達。気の合う仲間と長旅ができるのは、私の人生にとって格別に恵まれたことだと思う。

考えてみると、強い権限というのを持たされた立場にいたことがない。人事権など持つ前に公務員組織を離れることになったし、今も大学教員としての権限や義務は制限されていて少ない。専門分野の一員として機能はしているつもりだが、その業界団体の年長者として背負わされている立場やノルマもとくにない。(自覚していないだけかも知れないが)

イメージとしては独自商品を専売する個人商店主といったところだ。だから対面するお客の信頼が一番大切なことになる。そして「あきない」と言われるように、細く長く飽きずに現在に至る。

もしここに我慢が入りこむと、ストレスになってしまう。そうではなくやってこられた50歳以降の人生の助走が、この連載の時期にあるのだろう。

今、全国各地(現在10カ所)で長年に及ぶ「家族理解」の地域プログラムを実施中だ。お互い歳を重ねながら、引き続き呼んでいただける間はせつせと通う。いずれまもなくなくなる日は来るのだから慌てることはない。この仲間も時代を共にする時間の旅人同士である

旅では日常を離れたところで、長い時間一緒に過ごす。当然ハプニングもある。それを一緒にやり過ごす。お互い様の迷惑の掛け合いを了解して時が過ぎる。これが9時～5時のビジネス時とは違った時間の共有しかただ。

自分が歳をとっていくことを否定しない。物忘れも多くなる。新しいことが頭の中に定着しない。そしてその内、知っていたはずの古いこともこぼれ落ちていけよう。覚えている間にしか書けないことがある。

正確な情報、知識なら、然るべき場所をたどれば誰もがたどり着ける。だが、私の主観による繋がりや関係は、私にしか再現できない。ここに細々と書いている事もその内、私の中からも消えてゆく。だから自分のために、正確に書き残しておきたいと思う。

2014/05/25

2001年4月(十三年前)

04/◆ 日曜日、例によって、遅くまで寝ていてから仕事場D・A・Nへ。特にすることもなく、コミックス「クロサワ」を読む。映画「トラトラトラ」を降板することになった経緯を描いた作品。黒澤明については神格化されたことしか言っではいけないという日本の雰囲気には悼さすものとして評価したい。少なくとも、映画文化の中の人には書けなかった物語だろう。

トーク2001の第一回の中身を練る。自分のことをよく知ってくれている人たちを前提にネタ作りするのは危険だと思う。今のところ電話予約は10人だと聞く。昨年の新書「不登校の解法」出版記念の会を考えると十分の一。何人入るかじやなく、コンテンツ作りの機会にしたい。

独立して丸三年。ゆっくりしているなあと思う。最近の慌ただしさを少し反省する。でも、まあ元気で動いているのだから有り難いと思わなければ。忙しい、忙しいは趣味であり、自分自身への自慢だ。

04/◆ 朝、こと葉(娘)に声をかけて家を出る。今日で子ども達と一緒に暮らしが、終了。

仕事場で雑用を済ませた後、草津へ。性教育研究会の人たちの依頼で本のかたちになるよう、漫画家・外村晋一郎君に声をかけて続けてきた作業が大詰にきている。本のタイトルは「ちんちんがやってきた」一男の子のお母さんになったら読む本一に内定。この編集会議は現役の女性教員4名と外村と私で続けてきたのだが、学ぶことが多かった。同時に、月並みな感想だが性情報の氾濫にもかわらず、性教育はマイナーをなかなか脱出できないだろうとも思った。

記憶になかったが、娘が東京に出発するのを私は見送らなかったのだな。旅立ちに向けて書いて渡した長文の手紙データが今も私のPCの

なかにある。

娘が新幹線で読んで泣いたと語る文面を今読むと、私なりに頑張っていたのだなあと思う。

この性教育本は現在も継続販売されている。当初企画の進んでいた出版社で出せなくなって、知り合いの編集者に紹介してもらった別の出版社から出たのだった。この時一緒に執筆、編集作業をしていた寺田さんはまだ若いのに癌で亡くなった。

出版については、締め切りや約束を守らない学者先生の話をよく聞かされた。出版契約書なども、ほとんど交わさない業界慣ゆえか、約束を反故にされても泣き寝入り。

でも逆に出版を約束しておいて、大方書き上げた段階で、難しくなると聞かされる経験もこの時の他に、私はもう一度ある。本が売れなくなってきて、出版社も厳しくなってきた頃だったかなあ。

04/◆ 典子(妻)は娘を送りだしてほっこりしたのか、眠っている。私も朝は特に用件がなかったのでゆっくり。その結果、世間とはかけ離れた火曜日の朝である。

仕事場に来て、ICHIROのマリナーズデビューをBSで見ながらあちこちのワークショーププログラムへの返信を片付ける。

トーク2001の電話申し込みが20人になったとFAXあり。一昨日10人との報告があったから、担当さんは喜んでくれているだろう。「木陰の物語」新作を描きださなければならないのだが、まだノリがない。月刊「児童心理」の連載校正FAXはすぐに返信。

夜、映画「あの頃、ペニーレインと」を見る。青春ドラマである。思い入れの多い人がたくさんある物語だろう。私には普通。

妻は「空の巣症候群」にわりと直ぐになった。そして回復したと思う。私は、そんなことにはならないと思っていたし、実際ならなかった。それが現れたのはずっとずっと後のことだっ

た。その時のことは「家族の練習問題 第4巻」の前書（以下に掲載）に書いた。

＊

三人の子ども達が順に家を離れた時、かねてからの持論通り当然だし、ありがたいことだと思った。ことさら寂しいとも思わなかった。

妻は三人目が高校を卒業して家を出た後、「空の巣症候群だと思う…」といて、しばらく落ち込んでいた。私がいあまり反応しないのは、子育てにさほどエネルギーを費やしていなかったからだと言われ、そうかもしれないと思った。そして自分は冷たいところがあるのかなと思っていた。

しばらく後のことだが、子ども達はそれぞれ独立し、関東エリアに住むようになっていた。東京出張の折には、時間が合えば食事に誘い、近況を聞いたりしていた。

久しぶりに会って、元気な様子を確かめ、楽しく話して食べて、良い時間を過ごして別れた。

そしていつも利用するビジネスホテルに着いて、部屋のブラインドを閉めようと深夜の東京のビル群を見ているうちに、なぜか強烈に寂しく、つまらなくなった。「会わなければ良かった…」と突然思った。それぞれが元気で頑張っていることが、なんだかつまらなくて、どうしようもなくなった。わけの分からない感情だった。

三人の子がそれぞれ、みんな自分の場所で確実に歩みを進めていた。親として、これ以上有り難いことはないと思っていた。なのに、この感情はなんだ？と戸惑った。

その後も、子ども達に会って話すと、ホテルに戻ってからこんな風になることが数ヶ月続いた。そして、半年ばかり経って消えた。

ずっと後の事だが、このことを思い出してある人と話していて、これが私の空の巣症候群だったのかも知れないと気づいた。

私が居なくても、みんなもう大丈夫だと思えることが、そんな自覚はなかったのだが寂しくて堪らなかったのだろう。

まさか自分が…と呟く出来事は少くない。あの時の私は、まさにそれだった。

＊

04/◆ 夕刻からシメオンさんと佐藤さんの退職の送別会。御車会館で立食パーティである。K I S W E Cの関係者中心のこじんまりした集まり。

15年以上の時間と、今の自分への大きな道標になったシメオンさんとの別れである。佐藤さんはずっと我々のサポートをしてくれていた人だが、この夏から勉強をするためにアメリカにゆくとか。

自分にとっての先生は？と振り返ると、一番実質的な手ほどきをしてくれたのはシメオンさんだ。家族療法の第一歩からをシメオンさんから学んだ。

将来への目標をたてて、着手するところを間違えないことや、妥協しないことの大切さを教えられた。内容と同じく形式(枠)も、適切に設定できることが、未来に繋がることを学んだ。

耕した場の十年後に、実りがあるのを当然だと思えるようになったのは、シメオンさんからの学びだ。その実りの一つが自分だと思える教育を受けたのは良い経験だった。

04/◆ 漱石「坊っちゃん」の朗読（風間杜夫）を聴きながら「木陰の物語・好きになる力」のペン入れ。風間杜夫の声がとっても作品の空気に合っていて楽しい。



この頃、日本文学の朗読CDを購入して、多数の日本近代文学の古典を聴いた。そのおかげで印象に残ったものも多い。幸田露伴「五重塔」など、自分で選んで読むことはなかっただろう。

「好きになる力」はこの時に描いたのか。遠い昔の話だなあ。

04/◆ K I S W E C定例の面接日。朝のSさん夫妻、無事引っ越しの知らせ。M駅近くに、自分たち、息子、娘の三軒のマンションを確保。この線引きからどんな新しい暮らしが生まれるか。

昼食を観察者と「さと」へ。午後のKさんの面接、3時キャンセルの伝言に続いて、5時から可能だろうかとの打診。空いていたので入れる。それまでの間、スタッフみんなで雑談。なかなか楽しい。

最近は少なくなったが、月に一度の面接日。次々とケースがあり、私と早樫君が交代でセラピストを担当していた。

この家族は「変化」に分住を選んで実行した。

04/◆ 大学院事例研究クラスター全員集合の初日。60人ほどの学生と10数人の教員の顔合わせ。講義形式の授業はもう始まっている。「事例研究」は各クラスターにわかれて、15人ほどの学生に3人の教員によるチーム・ティーチングである。今日はその全体のオリエンテーション。

終了後の懇親パーティでは思いがけずたくさん学生の学生が話し掛けてくる。色々なつながりで私を知っているのだ。とりあえずなんだか嬉しい。自分は信じているが、他の人はわからないかもと思っていたことが、ポピュラリティを持ってきていることを発見。

Mさんのオープニングの話は、とてもよくわかった。そして私が求められた理由を他の人から耳にした貴重な機会のような気がした。これからも自分の代わりに忠実にやっていくことだ。

十数年前、大学院の創立時がこのようなであったことの記憶が薄い。一期生にはあちこちで活躍中の人が多い。それ以降との比較が正確にできるわけではないが、今も顔を合わせる機会の多い学年だ。

04/◆ 着々と新年が動いている。四時からF井くんがケースSVに来て、事例ではなく、心理療法全般についての質問をする。心理学を体系的に学ぶ機会がないまま、こういう実務世界に教育サイドから入ってくる非常勤労働者の安定基盤のなさを思う。

夜、八時すぎに職場を出て、映画「ハンニバル」を観にゆく。基本的に原作どおりで、よく作ってあるのだが、だから面白くなかった。ラストはまったく異なるエピソードにしてあって、そこだけが印象に残った。しかし、あの機内食のエピソード、原作で読んだのか、ほかでの記憶なのか……。

F井君……この頃から今もだが、新しく登場する専門職の仕事デザインがイージーなことを案じていた。食べていけない、実家住まいでなければやれない、来年の雇用はどうなるか不明。こんな専門家がどうやってキャリアを重ねていくというのか。

Dr. ハンニバル レクターの話はさっぱり覚えていない。機内食のエピソードって何だろう。再見するしかないのかな。でも残りの人生、時間に限りがあるからなあ、などと、いちいち思うこの頃。

04/◆ 読売新聞夕刊の死亡欄を見て驚く。頼藤和寛さんが亡くなった。ガンである。子どもが4人あったのではないか、まだ成人ではない子も。何だか自分にも起こり得る五十三才（同い年）の死である。いま発売中の文芸春秋に、頼藤さんの手記が掲載されている。そして、彼の遺作が文春新書で四月二十日にでると告知。まだ死ぬつもりなどなかっただろうに。でもいつ死んでもおかしくはないのは、誰にもあてはまることだ。

夕刻から草津の教師勉強会。境界例の診断をどこかでもらっている中学一年生のリストカット少女の事例。オープニングトークも長目に。質問もでて余計に長話になる。先月協議した昏倒する子の事例は、小学校卒業後、中学校には元気に通

学しているとのこと。

頼藤さんは大阪府中央児相の精神科医として、良い仕事をしておられたのだと思う。他府県の者にはお目にかかる機会も限られたものだったが、近畿の研修会でご一緒してから、大阪現代画廊でのマンガ展にも顔を出していただいた。そうか、13年も前になるのか。早逝した人のことを思い出すと、私は長生きして何が出来ただろうかとい



つも思う。

04/◆ 朝から今夜の第一回トークライブ2001の準備。次回以降のチラシ製作、そして内容の詰め。勝手に始めたトーク2001がいよいよスタートする。

いったい誰が来てくれるのか、不安がなくはなかった。しかし一方、京都駅前ルネッサンスビルの会場であるにもかかわらず、会場費負担が入場売上額に対する比率であるため、赤字になることがないのはおおいに勇気づけられた。

会場一番のりと思っていたら六時にすでにTさんとA野くんが来ていた。私が家族療法訓練を継続しているK I S W E Cの講座パンフレットを配っていいかといわれていたのである。

月刊DAN通信と重ねて参加者に受け取ってもらう。七時スタートの段階では二十人不足だった。五分だけ遅らせてもらって開会。この段階で三十数人、開始十分ほどで、五十人不足の参加になり、最終的には配布パンフレットの残部数から関係者も含めて五十六人の参加だったと判明。

Mさんが同僚とみえていたのは意外。ニコマの講演演題、それぞれまずまずの出来だったと思う

が、家族カタログのほうはもうひと工夫あってもいいかな。

終了後、受付を手伝ってくれた典子と浜大津に戻ってカプリチヨーザで夕食。疲れていたが、ほっとしてもいた。やはり多くの人に来てくださったことで、安心したところが大きい。

話したくて、伝えたくて仕方ないことが沢山あったのだろう。その情熱は今よりも強いだらう。

当時、講演を頼まれることも少なくなかったが、リクエストの内容は基本的に類似したものだった。「不登校の解法」(文春新書)がそこそこ売れて、この関連の依頼が多かった。それも悪くはないが、もっといろんな話がしたかった。

聴き手は求めていなくても、立川談志の事とか、一コマ漫画との出会いとか。そういう話はこのなかたちで、了解してくれた人の集まりで話すのが、双方に一番ストレスがない。

それにしても、入場料1365円とって、50人以上って、よく集まってくれたものだと思う。授業でも頼まれ講演会でもない、演芸会に近い。

04/◆ 土曜日、今夜は仕事場に泊まり込んで住友金属kkの仕事や展覧会の作品づくりをとっている。「児童心理」の今月号もまだ書いていないが珍しいことだ。やはり新学期早々色々立て込んだせいだろう。その割に効率が悪い。右半身がぴりぴりするのが気掛かり。

午後、久々にジャージに着替えて、御所一周に出掛ける。速歩していると元気になるような気がする。御苑のなかは春の土曜日で、沢山の人が出。戻って風呂に入って、読書して・・・とちっともはかどらない。

公務員を退職して3年。フリーとして立ち回り先や、やりたい企画が固まってきていた。健康のことも考えて京都御苑を歩こうなんて考えてい

た。ウォーキングなんて、何だか自由業だなあって感じのする行動だった。だが、ジム通いも含め、どれも定着しなかった。

加圧トレーニングと朝のウォーキングが継続するようになったのはこの、3、4年のことだ。

04/◆ 十二時頃、仕事場で起床。泊まり込んだわりに効率的ではない過ごし方をしてしまった。ぼむ展の準備をしながらPRIDE 13（格闘技）を夜中に見たりしていたのがよくない。ここにテレビデオを置いてから、つい見てしまうものがふえて能率が悪い。ながらの漫画家仕事の仕方になってしまう。

講演会にきてくれた人やメールの届いている人に返信など。余計な時間がいくらでもすぎる。夕飯には戻って二人で食べる。週一回、日曜日はこうするペースになっている。



その後「スターリングラード」を観にアークスへ。J. J. アノー監督作品。物凄い戦争再現である。戦争が膨大な消費活動であることを改めて思う。気をつけないと、経済の行き詰まりが大きな消費を熱望することになるんじゃないかと思ったりする。映像はすごいと思ったが、話は普通であった。この頃めったにいいなと思わなくなってしまう。

夢枕獏著「神々の山嶺」下巻に入っている。高校時代、山岳スキー部で山に登っていた頃の、関心の持ち方や話していた言葉を久々に思い出す。

格闘技が嫌いじゃない。やってみたいと思ったことはない。誰かのファンだったこともない。でも、結果的にはバンコクのタイ式ボクシングリン

グサイド観戦にまで出かけた経験があるくらいに、選択肢に入ったジャンルだ。

自宅近くに映画館があって、夕飯後、思い立って徒歩で映画を見に行けるのは理想だ。レイトショーも、終映後すぐ帰宅して風呂に入って寝る。

好条件下にあった滋賀県大津市浜大津のアーカスシネマ。唯一の不満は、先にオープンしていたシネコン・ユナイテッドシネマ大津より、椅子がチャッチーこと。どうしてここで金をけちるかなあと思うくらいお粗末東宝シネマズ。

j.j.アノー監督作品はデビュー作「ブラックアンド ホワイト イン カラー」1976年制作を大阪・エキブドシネマ例会で観て以来、「薔薇の名前」、「愛人/ラ・マン」、「セブン イヤーズ イン チベット」、そしてこれとよく見てきた。好きなんだけど、これという代表作のない人だなあと思っている。

「神々の山嶺」は興奮して読んでいた。面白かった。なのに、振り返ってみると夢枕獏著の本を、この後に読んだ記憶がない。氏が釣り好きで、世界の川や海に出かけた紀行文写真集「愚者の杖」は魅力的な大判本だが、買ったまま読んでいない。私もフライフィッシングを10年以上しているのだから、読めばいいのに。

釣りに全く関心のなかった時代、開高健著の「オーパ！」は大興奮して読んだのになあ。

04/◆ 月曜日、文学部の授業「人間関係論」の二回目。満員の教室である。まだ大学の中で落ち着いていられる場所がないので行って帰る。所要時間の見通し甘さとバスの遅れなどで、タクシーに乗ることになる。

授業で、自殺者の話をし、野田正彰さんの「喪の途上にて」のことを伝えると、終了後、本の情報を聴きにくるものあり。自分の周囲に、そういう人がいるとのこと。教室一杯の学生の集中は大したものである。

仕事場への帰路、乗り間違えた市バスのせいで、四条通りに出た。そこでずっと気になっていた大丸のp a p a sにいった。そこで麻の変わっ

たスーツを購入。ズボンの裾仕上げ即日でもらう。

仕事場にもどって住友金属のパンフレットイラスト、仕上げに手間取っている。明日の院でのファーストトークが気になる。

Papas で購入したぶかぶかのズボンはほとんどはなかった。しかし、麻デニム風のジャケットはすり切れるほど着た。破れ目が見えてからも、デニム風なのを良いことに、着ていたかった。しかしとうとう着るのを止めることにして、二代目を求めて papas に行った。同じものはなく、同系のもを買ったがお気に入りにはならなかった。

04/◆ 京都保健衛生専門学校からワンデイWS形式の「人間関係論」をとのリクエスト、承諾書を書いて返送。

同志社女子大(非常勤)の一回目と、院のファーストスピーカーと続けて話をしなければならず、ちょっと気掛かりだった一日。概ね順調だったが、女子大にいま一、作法の見えない娘がいて話のリズムに乗り切れず、時間を少々もてあます。ジョインニングセッションは難しいものである。次週、上手なリカバーが必要。

大学院の方が気になって、少し早めに終了して近鉄に。院では、児童福祉司の配置定数と虐待絡みでの増員状況の府県間格差の一覧を配布しながら、国の予算に見えるエッセ本気度や、社会の浮かれ風潮についてあれこれ話す。

あまずところなく話そうとして、あれこれ小出しになってしまったが、学生も教授陣もよく聞いてくれていて反応もいい。後半は小グループに分かれて話し合い。四人のグループに入り、質問を受けると話がとまらない。

帰宅して夜中の夕食の友にプロジェクトX「液晶にかけた男」を見る。なかなかいいのだが、従来のものからするといま一、押しが弱い。編集なのか、キャラのせいなのか。

あるキーワードを種に、予算獲得や人員確保は行うけれど、肝心のその対象に、効果はいまいち。こういう事を続けているのが、今の行政システムである。それは今に始まったことではない。

04/◆ 夕刻から門真教師家族療法WSのため、京阪大和田へ。早めに出て、うろろうしつつ現地入り。第二クールが始まり。F君や第一期の世話役の先生の転勤などで、メンバーは多少入れ替わっているが、参加者の気分は上々。ここには今、K I S W E Cで訓練を受けた人はいない。この状態は弱いのではないかと思っているが、さてどう展開するか。茨木市WSプログラムは類似の状態で、二期で終了したのだった。

この時期に始めた地域の継続勉強会は、中断するものも少なくなかった。結果的に、現在に至る十年以上継続プログラムと、先細りになったモノとの違いがよく分からない。たまたま、運、とでも考えるしかないのか。

04/◆ 朝は相談室。定時制高校に入った子は、久々の学校にカルチャーショック受けつつも頑張っている。

午後、家裁で新件。同居中なのに、裁判所からの呼び出し状で初めて知らされる妻の離婚申し立てという奇妙なケース。

彼女はもう30代になってバリバリ働いているだろうか？お母さんになっていてもおかしくない。時が経つとはそういうことだ。そして、こんな時間を、「登校刺激は与えず、見守ってあげましょう」と言って何も起こせないまま、やがて「ひきこもり」とラベリングしただけで無為に過ごさせ、手を引いた専門家もたくさんいた。

一緒に暮らしている妻に、知らないうちに離婚の申し立てをされ、遅く帰宅した夕飯のテーブルに家裁からの呼び出しが載っているというのは、相当にシュールだ。

04/◆ 朝、ゆっくり目に家を出て名古屋経由で、名鉄・日本ライン今渡駅へ。岐阜県可児市で民生児童委員の研修会で講演。

可児市は住友金属の資源ゴミセンターの取材に以前行ったことがあって少しは知っているところ。犬山市の奥である。150人あまりの出席。まず順調な話になったと思う。年配の男性が多かったので、面白さより、シリアスと意外、納得の展開にする。

女性に比べて男は、歳をとるほど弾け方が鈍くなる。感受性の年取り方に間違いがあるように思う。これと中年の男の自殺の多さは関係あるだろう。

新幹線の車中「永遠に去りぬ」ロバート・ゴダード著を読んでいる。深作さんに会った時、読み終わったからともらった本だ。深作さんには以前、アゴタ・クリストフの「悪童日記」も教えてもらった。読書を自分だけで完結させてしまうと、どうしても似た傾向のものになってしまう。信頼できる読書人を友人に持つのは幸運である。

京都に帰り着いたのは7時半ごろだった。もう本日は終了と思わないでもなかったが、展覧会の準備を明日、明後日、心置きなくするためには、住友のパンフレットの仕事を今日中にすませたい。



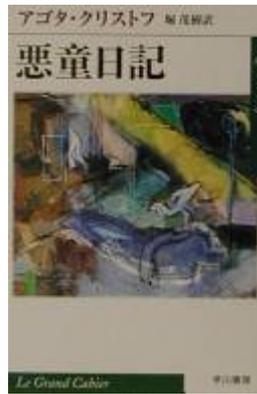
そう決心するために、自分へのプレゼントとして久しぶりにDVDを三枚購入。「グラン・ブルー」「ナイトメア・ビフォー・クリスマス」そして「グラディエーター」、みんな一度は観たものばかり。いつ観られるかわからないが、好きな映画のコレクションが少しずつ増えていっている

のが楽しい。ビデオで見ているのと違う感じがするのはなぜだろう。映像を記憶できている気がするのだ。

仕事場で最終電車ぎりぎりの時間までかかってパンフレットを仕上げ、確認のFAXを送信してから帰宅。

今とは別の意味でよく働いている。

もう亡くなったが、深作みどりさんには本のガイドをして貰った。元々は家族療法訓練のシメオン先生の通訳として毎週、二年間付き合ってた。その後も、通訳としていろいろお世話になった。そして「悪童日記」を紹介された。アガサ・クリスティ？と思ったこの作家が凄かった。



長く続いたレンタルビデオの時代に代わって、DVD時代の幕開けだ。TSUTAYAの並びが刻々変化していた。ビデオの時代には我慢することにしていた映画コレクションを、DVDになって解禁した。

今も続く趣味だが、その結果、死ぬまでに観ることはできないに決まっていると思う量に増えた。でも、楽しいのだから良いのだ。これが道楽というものだろう。

04/◆ 今日、明日でぼむ展の作品の仕上げをしなくてはならない。ひたすら描いて張って彩色して、を繰り返す。この間、朗読のテープをずっとかけていて、「坊っちゃん」CD4枚で全5時間を聴き終える。それから泉鏡花「高野聖」(朗読・佐藤慶)を怪しく聴く。なかなか面白い。

その後、研究者の解説CDを聞こうと思ったの

だが、声の悪いのに愕然。朗読のあとに聴けたものではない。

なかなか明治期の日本文学に手が伸びない。そんな時に朗読の日本文学集を見つけた。そこそこの値がしたが、読む機会のないままになることを考えたら決断はついた。

毎月送られてくるものは全部聴いた。マンガ作品のペン入れをしている時に、BGMとして聴いていると程よかった。

04/◆ 朝、篠原からの電話で、昨日ギャラリー展示したパネルの三分の一くらいが落ちていると連絡があったという。両面テープの粘着力が弱かったのか。急遽対応が必要だが、私は授業なので無理だと断る。画面にピンで穴を明けることになるので、販売も中止しようと思うという。

仕事場に二件、講演の打診。一件は日程あわず、もう一件は、「更正保護」関連で、近畿保護司会の話。6月の夕刻1時間半ほど。引き受ける。

「人間関係論」の授業、教室は一杯。あれこれ話そうとしたわりに、イマイチ盛り上がりの欠ける結果になった。コンテンツが多すぎるのは考えものということ。マンガ展案内状を欲しい人にどうぞと教壇に置いておいたら50枚あつという間にはけた。誰が見に来るかは疑問だが。

いったん仕事場に戻って大阪現代画廊に。近くに事務所を構えている義弟の坂口会計事務所に立ち寄ると、姪の相談をしてくるので思うところを話す。

ぼむ展にはKさんが来てくれた。彼女の新しい仕事展開の相談にのる時間をとる約束をする。その後、Nさんもみえる。

ゴダード「永遠に去りぬ」読了。最初の数ページにしか登場しない人物の影響力を、ずっと維持し続ける力量に関心。人間の持つ、事実認識のうたかた性を看破される気がする。動機をたどれば、事実が見える気も、あらためてする。

04/◆ 文春新書編集部のUさんと久しぶりに話

す。三刷の話をFAX通知受けながら、なかなか直接話せずにいた。

女子大の二回目。ポディワーク取り入れて、なんとか集中させる。だんだん馴染んでくるから、時の働きとは大きなものだとはあらためて思う。最初の印象に頑固になってはいけない。毎年のことだから分かって良さそうなものだが……。そのあとは衣笠に駆け付けて大学院の合同講義。Tさんの「応用行動分析」とFさんの「REHAB」の話を50分ずつ。共に現場にいる人なので、具体的で果敢である。

04/◆ ちょっと遅れて16時すぎにぼむ展会場に。Cさん夫妻が来てくださったのに不在であったことが心残り。展覧会ではこういう傷がときどき残ってしまう。義弟が娘の入学祝いを届けてくれた。

終了後、梅田の大和証券に勤務するいどむ（次男）と夕飯を食べる。「吉在門」は国府に教えて貰った比較的安くおいしい魚料理を食べさせる店。仕事のこと、生活のこと、イロイロ話す。同期がいなくなつて、ちょっと暇しているという。

我が家では次男だけが、いわゆる就活をして、企業と呼べるところで働き始めた。私も公務員だったから民間企業生活には馴染みがない。健康で頑張ってくれていたらいいいと思っていたが、山一証券が倒産した翌年に証券に入社した選択は、そもそもが主張的なものだった。

十年後、会社の意向と本人の希望にズレが生じたとき、妻子もあつたが退職をした。そして同じ業界の外資系に再就職した。

04/◆ 朝は相談室。今日は画廊に行かない。夕刻からはK I S W E Cの月例S V。出足が鈍いが最終的には15人出席。メンバーにとってのこの集まりの意味が何となく分かる気がする。滝川一廣「ころはどこで壊れるか」洋泉新書が面白い。興味深い学びや整理がある。

この相談室は今に至るまでずっと続けている家族心理臨床の現場だ。様々な問題、家族と出会う場は、私にとって大切だ。

04/◆ 金曜日の夜、画廊に春日丘高校山岳部時代の友人5人が集合。それにJが加わって6人。いつもの中華屋で年に一度の会食をし、若者一杯のC a f eへ流れて雑談。

会場に来てくださったのに、お目にかかれなかった方があった。この会場での展覧会は来年がフィナーレ。三十数年続いたものを一応終えて、新たな出発を考えているのは若いということかな。

この集まりは私にとって、珍しく同窓会的だ。だから、展覧会がフィナーレを迎えたことで、この集まりも途絶えた。

年寄りが集まって昔話をしているのが私は嫌いだ。今の方が面白いし、もっと言えば、これから何があるかの方が絶対に楽しみだ。

04/◆ ぼむ展に。夕刻、典子が来て、篠原の奥さんや国府夫人も、外村の奥さんにカワキタ夫人も。約束していた訳ではないのにみんな集まる。奥さん達の井戸端会議状態。

これから十年経つか経たない間に、篠原夫人が、そして外村夫人が癌で亡くなった。時は強引に人を変化させる。何が起きてもおかしくないと感じさせられた。

それぞれの子どもが、ギャラリーで走り回わるのを叱っていた頃から40年近い年月。その子達がそれぞれ親になっているのだからなあ。

04/◆ ぼむ展最終日。昼過ぎに会場に行く途上、南光さんから電話。立命の授業で彼について話したことを、奥さんの友人が受講していて、伝わった旨聞く。縁は不思議なものである。

その後、千客万来でバタバタ。しかし事前のハガキ案内状を出さなかったことで常連の中に顔を見なかった人も多かったような気がする。

その一方、大学の教室で配ったことで、社会人入学の学生がたくさん来てくれた。新しいお客さんが来てくれるのは嬉しい。展覧会を撤収してみんなで会食をし、夏のフライフィッシング合宿日程を決めて帰宅。

遊(長男)が戻ってきている。典子と夕飯を食べながら話しているのに加わる。その後、映画「あなたのために」ナタリー・ポートマン主演を観にゆく。なかなか良いドラマ。ビデオでもかまわないと言えばそうだが、「ビューティフル・ガール」をビデオで見たときに残念だったから。

帰宅してK-1の録画を見ていると、外出していた遊が戻ってきたので一緒に見ながら、遅くまで仕事の話をする。あれこれ、同時並行的展開をしているようだ。

この時、息子はまだ会社を立ちあげてはいない。大阪の編集プロダクションで走り回っていた頃だろう。そう考えると10年という時間は本当に大きな変化を作り出す。しかし一方、私自身について言うなら、基本的には今と変わらない。

